
たくさんの死とたくさんの夢

よしかず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たくさんの死とたくさんの夢

【Nコード】

N2537R

【作者名】

よしかず

【あらすじ】

自分が死ぬという夢を見た康貴は通学途中にトラックにはねられて、即死したはずだった、だがそれは夢だった。もう一度同じように目を醒ますが、また通学途中で死んでしまう。実は康貴は何回も死んだ後、何回も生き返っているのだった。果たして康貴はこの抜けられない夢から脱出できるのだろうか…

第一話 死夢

夢を見た。

『自分が死ぬ夢』だった：

いつもの朝、いつもの自分の部屋、俺はそこで目を醒ます。

「母さん、おはよう。」

「おはよう康貴^{こうき}。」

「行ってきます。」

そして、いつもの会話。

でも、そこからは俺の『いつもの』ではなかった。

高校まで5分、そんな短い通学路で俺はトラックにはねられた。

即死だった…はず…

—

夢だった。

「なんだ、夢か。嫌な夢を見ちまったぜ…」

いつものように俺は学校へ向かった。

夢と同じようにトラックにはねられた。

—

夢だった。

「おかしい…おかしいぞ、コレ…」

気づくのが遅かったのかもしれない。

「実は、俺は何回も死んでいて、その度に何回も生き返っている！
？」

そんな馬鹿な…

試しに、もう一度通学してみる。

トラックが来たのはちょうどこの辺り…

すると、ものすごい速度でトラックが俺に向かってきている。

運転席を見ると、運転手は眠っていた。

「あ、危なかった…」

流石に三回目だ、間一髪で避ける事に成功した。

しかし、それだけでは無かった。

「ぐはあっ!!」

大量の血が俺の体からこぼれる。

俺の背中からカーブミラーの柱の部分が貫通していた。

そ、そんな…

トラックがカーブミラーに当たり、その衝撃で俺に向かって柱が飛んできたのだ。

—

「わけが分からねえ!どうなっているんだ!?!」

ベツトの上で叫んだ。

「どうしたの?康貴?」

心配そうに母さんは声をかけてきた。

そういえば母さんは俺が死んでいる事が分かっているのだろうか?

いや分かるわけないか。

「俺、今日学校休むよ。」

「あら、そう?じゃあ、母さん仕事行くから。」

これなら、俺は死なない。死なずに済む。

はずだった…

第二話 天使

「順調に進んでいるかい？ミカエル。」

「はい、神様。これで人類は自滅の道を歩む事になるでしょう。」

—

「畜生！もう数えて50回以上だ…」

そうだ、俺は家に居た。

家に居れば車にはねられる心配も無いし、安全だと思っていた。

まさか、家に強盗が入るなんてな…

ナイフで心臓を一刺しだった。

痛みと共に意識が無くなり、気がつくまでベットの上だ。

次はいつもの通学路とは別の道を行った。

だが結果は同じだった。

どう足掻いても俺は死ぬ。

何度も、何度も…

「お困りのようですね？」

車通りの少ない道を歩いていると声が聞こえた。

だが、周りを見渡しても誰もいない。

「上ですよ!」

上? 上って空があるだけ…って?

「誰だ、お前は!」

たしかに上にいた。

翼の生えた女の子が。

「はい、私は天使ミカエルです。」

は? 天使? ミカエル? 何だいきなり。

ってどうか…

「あとう、パンツ見えてますよ?」

「えっ!」

俺は下にいて、彼女は上にいる、下から上を見上げようとすると必然的にスカートの中が見えてしまう。

というか、天使もパンツとかスカート穿くものなんだな…

「ちょ、ちょっと見ないで下さいっ!」

彼女はスカートに手を当て俺に見えないように隠した。

すると、ゆっくりと地上に降りてきた。

翼の生えた女の子、天使の存在。

普段の俺なら信じられずにいるのだが。

何回も死んだりしているし、何が起きても平気というか、そろそろ何か来るだろうと予感していた。

だから驚いたりとかはしなかった。

いや、むしろ今の俺を助けてくれるかもしれない存在が現れた事が何よりも嬉しかったのだ。

第三話 不死

「選ばれし者？この俺が？」

「はい、そうです。久保康貴^{くほ こうき}さん。」

俺達は公園のベンチで話していた。

無事に公園までたどり着けたのは奇跡ではあるが、そんな事は気にせず、俺は知りたい。

どうして俺が死ぬと、夢ということになって、また生き返るのかを。

「神に選ばれし者は一度死ぬと、魂の再構築が行われてまた生き返るのです。」

魂の再構築？死んだ魂を創り直すという事か：

「でも、それって大変なんじゃないのか？それをどうして俺の魂を使ってやっているんだ？」

「え…、そ、それは私にもよく分かりませんが、あなたは不死身です。よ、良かったじゃないですか。」

良くない…いや、絶対良くないだろう。

俺が死ねば時間はまた今日の朝に戻ってしまうからだ。

こんなの不死身などでは無い。

ずっと続く夢に永遠に閉じ込められているだけだ。

それにミカエルは何かを隠しているのか？

次の瞬間、大地が大きく揺れ始める。

「じ、地震か！？」

大きな地震だ、俺はその場で倒れてしまい、身動きがとれない。

そして、公園に備え付けてある外灯が俺に向かって倒れる。

頭蓋骨を強打、即死だ。

そしてベットで目を醒ます。

「康貴さん？」

ミカエルが壁をすり抜けて現れた。

便利な能力だなあ。

どうやら天使は時間を遡さかのぼっても影響は無いみたいだ。

これなら、話を続ける事ができる。

でも、どこで？俺に安全な場所があるのか？

「行ってきます。母さん。」

この台詞も何回目だろうか。

母さんもそうであったが、他人にはミカエルの姿が見えていないらしい。

って事は、公園で会話していたのは全て、周りからは変な独り言を言っているようにしか見えていなかったという事だ。

そう思うと急に恥ずかしくなってきた。

「今から、安全な場所を探すぞ、ミカエル。」

「はい、康貴さん。」

なるべく小声で話した後、俺達は家をあとにした。

第四話 記憶

天使は元々は人間だ。

と誰かから聞いた事がある。

じゃあミカエルはどんな人間だったのだろうか。

そんな事を考えながら、俺はもう何千回も死んでいる。

「なんで、俺はこんなにも死ぬんだ？」

最初は自分に与えられた、もう一度生きるチャンスだと思っていた。

でも変だ、何かおかしい。

トラックを避けても俺は死んだ、何度足掻いても必ず死ぬ。

まるで神は俺に無駄なチャンスを与えているようにしか見えない。

「ミカエル？おい聞こえているのか？」

「え…はい？何ですか？」

ミカエルは何か考え事をしているように見えた。

やはり、何か隠しているのか？

「教えてくれ、神がやろうとしている事を。」

「ふえ？神様ですか？神様はあなたを不死身しただけですよ。」

「そんなの嘘だろ？何か目的があるんだろ！教えてくれよ！」

俺はミカエルの両肩を掴み、激しく揺する。

「ちよっ、ちよっとやめて下さい！」

「あ…悪い…」

ミカエルが嫌がる素振りを見せ、俺はすぐに手を離れた。

永遠に『今日』を生きている俺は、そこから抜け出すために必死になり過ぎていたんだ。

女の子には秘密の一つや二つぐらいあってもいいじゃないか。

ダメな男だな、俺って。

「え？何なの…痛い。頭が…痛い…」

「おい、どうした？ミカエル!？」

急にミカエルは頭を抑えながら、しゃがみ込んでしまった。

「ごめんなさい…康貴さん…」

「えっ？」

そう言って、どこか遠くへ飛んでいってしまった。

ふと、俺はある事を思い出す。

「しまった、この時間は!?!」

地震だ、近くには今にも倒れそうな電柱もある。

またこのパターンかよ…

—

宇宙空間にも似たような場所に一人の男がいた。

彼は全ての創造者でもあり、破壊者でもある。

「ミカエルが暴走したみたいだね。」

そう、彼こそが『神』である。

「ふ…まあいいや。少しは面白みが増すかな…」

神は一人、笑っていた。

—

痛い…私は一体どうなるの？

天使は本来、痛みなんて感じないはずなのに…

何なの？私の頭の奥から何かが：

え？康貴さんがいる：

「美香^{みか}ちゃん、一緒に遊ぼうよ。」

「うん、行こう。康貴くん。」

美香…？私の名前…？何？これは…昔の私の記憶？

私の人間だった時の記憶なの？

この場面は！？

私の最後の記憶…死ぬ時の記憶。

「嫌ああ！！やめてえ、痛いよう…助けて…」

突然、家に入ってきた男にナイフでたくさん刺されたんだ：

まるで地獄のようだった：

「ねえ、起きてよ…美香ちゃん…美香ちゃん！！！」

「やめなさい、康貴…美香ちゃんはもう…」

「康貴くん、私はここよ、ここにいるの…」

あの時、私は死んだ事も分からなくて、ずっと叫んでいたっけ：

でも、私が康貴さんと幼なじみだったなんて…

酷いです、酷いですよ神様…

私に康貴くんを騙させるなんて。

第五話 異変

ミカエルが居なくなってから1億回以上死んだ。

俺は異変に気づいた。

朝に見ている番組の司会者が変わっている事に。

「あれ、前の司会者ってどうかしたの？」

「何言っているの？ずっと司会者はこの人でしょ。」

意外な言葉が母さんの口から出た。

1億回も見ている番組だぞ、俺が司会者のあの特徴ある顔を忘れた
り、間違える事なんて無い。

どういうことだ？まるで、最初から存在していないというような言
葉だ。

「こんな時にミカエルがいればな…」

「みかえる？誰？新しい友達？」

「いや、なんでもないよ母さん。行ってきます。」

何かが違う…

1億回も見えた景色に俺は違和感を感じた。

この辺には、散歩しているおじさんがいたはず…

あっちには赤色の車があったはず…

無くなっている…

あったはずの物が無くなっている。

でも、どうして？

考えながら歩いている内に、トラックが来る場所まで来ていた。

「おっと…危ない、危ない。たしか車道を全速力で横切れば、安全だったはず…」

赤信号のまま俺は走り抜ける。

何回か死んでいく内に攻略パターンが分かってきたからな。

無事に学校に着くと、クラスメイトが一人いなくなっていた。

いないというか、机が無い…

他のクラスメイトに聞いてみると…

「誰？うちにそんなやついたっけ？」

何度聞いても、同じ答えだった。

どうなっているんだ？

次は地震だ、俺は倒れてくる物が少ない校庭へ出る。

無事に攻略できた。

次は津波、火事、通り魔、交通事故、発電所の爆発…

「はあ…はあ…」

こうやって全て回避して、時間を稼いでも、この永遠の夢から脱出する方法は一つも出てこなかった。

俺はもう…

諦めるしかないのか…

第六話 真実

天使になったばかりの頃を思い出す。

「人間は愚かな生き物だ、ミカエル。」

「はい、神様。」

違う…嘘よ。

確かに人間は愚かなのかもしれない…でも、康貴くんは私が人間だった時もそうだったし、今も優しくった、一緒にいて楽しかった。

今、神様は康貴くんたちを消そうとしている…

そんな事はさせない！！

「早く、神様の所へ…」

天国へ繋がっている扉『ヘヴンズドア』へ私は向かった。

「人間の頃の記憶を思い出したのかい、ミカエル？」

扉を開けると奥に神様が立っていた。

「はい…」

「キミは今になって人間の味方になるというのかい？キミは人間に殺されたんだよ？」

確かに私は人間に殺された。

でも、そうだとしても全ての人間を憎いわけじゃない。

「私は…神様は間違えていると思います。」

「間違えている？この僕が？そんなのありえない！！僕は神だぞ！」

神の怒りは周りの空間に影響を与える。

一瞬にして空間は大爆発を起こした。

—

「愚かな人間に破滅と再生を。」

全てはこの神様の言葉からだった。

神様は人間を創り直すとおっしゃったのだ。

当時、人間の頃の記憶を無くした私は神様の意見には賛成していた。

「ミカエル、面白いことを思いついたよ。」

「何ですか？」

「ただ、人間を消すだけじゃつまらないだろう。一人の人間が死んでいく様を見ながら、やろうと思ってね。」

一人の人間で、たくさんの人間を消す方法？

「どういことですか？神様？」

「死んだ人間を他の生きた人間の魂を使って再構築させ、生き返らせるのさ。そうすれば、その人間が死ぬたびに他の人間は魂が無くなって消失するだろう。」

神様はこんな酷い事を楽しみとして、行っていた。

許せない…

その人間に康貴くんを選んだこと。

康貴くんの監視に幼なじみだったこの私を行かせたこと。

そして全ての人間を消そうとしていること。

「だから、もうやめてください。神様。」

とにかく、魂の再構築をやめさせなくちゃ…

「嫌だ！僕はもう決めたんだ。この人間たちも愚かであると…だから、創り直すのさ！！」

でも、そんな事したら、康貴くん…

私はもう康貴くん到会えなくなってしまう。

「だったら、力づくでも私は神様を止めます。」

「止める？この僕を？神に逆らう事はどういうことか分かっているのかい？」

翼を大きく広げて、私は超高速で神様に向かって突進する。

「行けえええ！！！」

だけど、私の攻撃は途中で終わった。

体中に無数の刃が私を襲う、あの時と同じように…

「あなたたちは！？」

神様に仕える、他の天使たちであった。

「待ってたよ。ラファエル、ガブリエル。」

「どうやら間に合ったみたいですね。」

大きな槍を構えているのがラファエル。

「神ちゃん、あとはうちに任せとき！」

そして筋肉質の男がガブリエル。

「痛っ、血？血が出てる…」

さっき受けた傷口から血が出ている。

「おやおや、ミカエルにはまだ言っていなかったね。ラファエルが持っている槍の事。」

まさか、あの槍は！？

「そうだよ、『せいそう聖槍』またの名を『ロンギヌスの槍』さ。」

「この槍は聖なる武器です。我々、天使にも傷を与えることのできる物です。」

「まあ、諦めろってことやな。」

そんな…私は…

ごめんね、康貴くん…

本当にごめんなさい。

第七話 孤独

俺が次に目が醒めたときには、既に母さんの姿は無くなっていた。

気がつくと、トラックにはねられる心配も無くなった。

なぜなら車はもう道路を走っていなかったのだ。

人がいなくなってる？でも、どうして？

俺は誰もいない街をひたすらに歩いた。

だが、何一つ手がかりも無かった：

一人でいると無性に話相手が欲しくなる。

「どこにいるんだ？ミカエル。」

いつの間にか俺はミカエルを探していた。

ミカエルに妙な懐かしい気持ちを感じていたからなのか。

「こういう時は上でも見てみるか…」

初めて会ったときの事を思い出して、上を見た。

空を見ると、とても透き通っているのが分かる。

雲一つ無い空、俺は何かを見つけた。

「何だ？まさか！？ミカエルなのか…」

ゆっくりと、こっちに落下してきている。

俺はそのままミカエルを受け止めた。

よく見ると、ミカエルの全身には切り傷でいっぱいだった。

「おい、何だよコレは！？」

ミカエルに感じていた懐かしい気持ちと、昔の記憶が混ざり合う感覚だ。

「おい、起きろよ！ミカエル！！」

「こ…康貴くん…？」

ミカエルが俺の事を『康貴くん』と呼んだ時、俺は全てを思い出した。

「み…美香ちゃんなのか？」

「うん…いろいろ嘘ついて、ごめんなさい。」

「何謝ってるんだよ、バカ。こっちこそ俺のせいで…」

そうだ、あの時も…きつと今も…俺のせいなんだ…

「康貴くんは相変わらず優しいんだね。」

「そんなこと、どうでも良いから早く手当てしないと…」

今も傷口から血が出ている。

俺は着ている服を手で千切って、包帯のかわりに傷口に巻いてやった。

「それで、ミカエルがどこかへ飛んでいった後、何があったんだ？」

近くにあった家のベツトにミカエルを寝かせると、俺は質問する。

—

「そうか…俺はただの遊び道具でしか無かったのか…」

「ごめんなさい…私…神様を止められなかった…」

謝る必要なんて無いのに、謝るミカエルを見ると、神に対する憎悪が増す。

「くそっ！もう遅かったんだ…」

もう人間は俺一人しかない。

これからどうすればいいんだ…

「なあ、ミカエル？俺たち…」

「ごめんなさい…ゴホッ、ぐ…ごめんなさい…」

え…？

「おい！？ミカエル？起きろよ…起きてくれよ。美香ちゃん…」

『美香ー！！』

俺は叫び続けた、その後ずっと泣いた。

ミカエルの意識は無い…

俺は一人、崖から飛び降りた。

もう二度と起きる事は無い…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2537r/>

たくさんの死とたくさんの夢

2011年10月6日20時39分発行